

ボーダーフリー大学が直面する教育上の困難 –授業中の逸脱行動に着目して–

葛 城 浩 一 (大学教育開発センター准教授)

1. はじめに

日本における学生研究では、大学や学生の多様性がこれまであまり考慮されてこなかった。つまり、先行研究では、「多様な大学や大学生が一括して分析されることが多く、また個別大学の分析も、その結果が大学生全体に一般化される傾向にあった。とくに分析の中心になっていたのは都市部のかなり入学難易度が高い大学の学生、卒業生であり、その結果が現代の大学生像として一般化されることが多かった」(山田 2005、6頁)のである。

しかし、日本の高等教育が既にユニバーサル段階にあることを考えれば、大学や学生の多様性は十分に考慮する必要がある。特に、入学難易度の低い大学、なかでも「ボーダーフリー大学」と呼ばれる大学を研究対象とすることは、今後の日本の高等教育のあり方を考える上で非常に重要であろう。なぜなら、こうした大学は、基礎学力や学習習慣、学習への動機づけの欠如といった、学習面での問題を抱える学生を多く受け入れており、より多くの教育上の困難に直面しているからである。

なお、本稿では、「ボーダーフリー大学」を、「受験すれば必ず合格するような大学、すなわち、事実上の全入状態にある大学」と定義する。「ボーダーフリー大学」という用語自体は、そもそも河合塾による大学の格付けであり、通常の入学難易度がつけられない大学の意味で用いられている。本稿の定義に基づくボーダーフリー大学に相当する定員割れを抱えた大学は、2008年度には、私立大学全体の5割近く(47.1%)にまで達している(日本私立学校振興・共済事業団広報 2011)。

さて、こうしたボーダーフリー大学を研究対象として、本稿が明らかにしたいと考えるのは、ボーダーフリー大学が直面している教育上の困難についてである。特に授業中の逸脱行動に着目したい。「逸脱」とは、「最も広い意味では、それぞれの社会や集団で分有されている社会規範に反する現象のことをいう。それが社会規範に反する行動ならば逸脱行動」(『新教育社会学辞典』)となる。本稿では、「大学の授業は学びのために存在する」という前提に立ち、授業中の逸脱行動を「自分や他者の学びを阻害する行動」と定義する。

授業中の逸脱行動が問題になっているのは、なにもボーダーフリー大学に限ったことではない。実際、授業中の逸脱行動の様子について言及がなされている文献では、ボーダーフリー大学に話を限定していない場合の方が多いようである¹⁾。しかし、筆者が2005年に行った質問紙調査では、例えば「私語」や「いねむり」などの逸脱行動は、中堅大学よりもボーダーフリー大学で多く行われていることが確認されている(詳細は、葛城(2007)を参照)。こうした知見からだけでも、ボーダーフリー大学がより多くの教育上の困難に直面していることがうかがえる。

しかし、本稿では、ボーダーフリー大学に所属する学生(以下、ボーダーフリー大学生と表記)に対する自由記述式の調査を用いることによって、ボーダーフリー大学が直面している教育上の困難をより詳細に明らかにしたいと考える。具体的には、授業中の逸脱行動の実態だけでなく、逸脱行動に

対する学生の捉え方や大学の授業に対する学生の期待も分析の視角としたい。そして、そこで得られた知見をふまえた上で、ボーダーフリー大学の主要な教育目的とは一体何なのか、それを獲得させるためにはどういった方法が考えられうるのか、といった点についての考察を行いたい。

2. 調査の方法

本稿で使用するの、ある地方都市に所在する、ボーダーフリー大学に位置づけられる偏差値 40 台半ばの私立 A 大学で実施した自由記述式の調査である。私立 A 大学は 4 年制、共学の人文科学系学部と社会科学系学部から成る複合大学である。学生数は 500 人未満であり、創立して 20 年未満の、いわば新興の小規模大学である。

調査は、2011 年 10 月から 11 月にかけて複数回にわたって実施した。「A 大学の授業の良いところはどこですか？また、悪いところはどこですか？」「あなたが今までにみたふまじめな学生のなかで、これはすごかったというケースはどのようなものでしたか？」「A 大学には、ふまじめな学生が何割ぐらいいると思いますか？また、そうした学生を、同じ A 大学生としてどのように思いますか？」といった問いに対し、それぞれ 20 分程度で自由記述してもらった。分析対象者数は 30 名であり、学年・性別による内訳は、4 年・男性 5 名、4 年・女性 1 名、3 年・男性 3 名、3 年・女性 5 名、2 年・男性 8 名、2 年・女性 4 名、1 年・女性 4 名である。

3. 授業中の逸脱行動の実態

授業中の逸脱行動にはいくつかのタイプが存在する。記述内容を分類した結果、ボーダーフリー大学生の授業中の逸脱行動は、「疑似出席」「ながら受講」「教員への反抗」に大別することができた。以下では、ボーダーフリー大学生の実際の記述を引用しながら、それぞれの実態についてみていきたい。

3-1. 疑似出席

「疑似出席」という耳慣れない表現を用いてはいるが、いわゆる「中抜け」「エスケープ」と呼ばれる行動を指す筆者の造語である²⁾。「中抜け」とは、授業を途中で抜けだし、授業終了前に戻ってくる。こと。「エスケープ」とは、授業を途中で抜けだして、そのまま戻ってこないことである（島田 2001）。こうした「疑似出席」は、ボーダーフリー大学では当然のように行われている。

- ・最初に出席をとる授業があるのですが、その授業で出席だけをとってすぐ教室に（原文ママ）出てしまう人がいるのでそれはふまじめだと思います。逆に授業の出席確認が最後にある授業があるのですがそれと同じく授業の最後にだけ出席してしまう人がいると思います。（2 年・男性）
- ・私が入学してからすごいと思ったのは、みんな出席をとったらすぐに帰るということでした。（1 年・女性）

- ・(遅刻を) 30分程度なら認めている講義も多いのですが終了10分前にやってきて出席カードだけ出して帰るといった人がとても多いのです。(3年・男性)

「出席だけをとってすぐ教室に(原文ママ) 出してしまう」「授業の最後にだけ出席してしまう」といった行動は、「中抜け」「エスケープ」の極みであるといえよう。しかし、こうした行動自体はボーダーフリー大学以外でも珍しくないのはいままでもない。興味深いのは、「みんな出席をとったらすぐに帰る」「終了10分前にやってきて出席カードだけ出して帰るといった人がとても多い」という点である。「疑似出席」という逸脱行動の質的側面ではそう違いはないにしても、量的側面では違いがあるといえるのかもしれない。

学生たちが「出席」にこだわるのは、「出席さえすれば単位がもらえる」と考えているからである。ボーダーフリー大学生の授業における努力の配分は、「出席」に著しく偏っているという遠藤(2006)の知見に鑑みれば、ボーダーフリー大学生は特にその傾向が強いといえよう³⁾。その要因としては、ボーダーフリー大学では出席重視の成績評価が行われていることが考えられる。ボーダーフリー大学の教員に対するインタビューでは、テストで点数が足りないので不可を出したくても、「上」から不可にしていけないという圧力がかかり、結局は「出席さえすれば、単位がとれるシステム」になっているという声も聞かれた。大学によっては、そうした事情が学生の「疑似出席」に拍車をかけているのである。

3-2. ながら受講

「ながら受講」というこれまた耳慣れない表現を用いてはいるが、授業に関係のない他のことをしながら、授業を受けるという行動を指す筆者の造語である⁴⁾。島田(2001)によれば、「ながら受講」は、1990年代には、授業を聞くことに重みがあるのではなく、他のことをすることの方にウェイトが移っており、1990年代半ばを迎えると、授業をまったく聞こうとしない「ながら受講」が急速に拡大したのだという。

はたして、ボーダーフリー大学では、どのような「ながら受講」がみられるのだろうか。本項では、「ながら受講」を、他者に迷惑をかける度合いの強いものと弱いものとに分類し、それぞれの実態についてみていきたい。

(1) 他者に迷惑をかける度合いの強いもの

他者に迷惑をかける度合いの強い「ながら受講」の代表は、「私語」であろう。島田(2002)によれば、1960年代半ば頃から私立の女子短期大学でみられ始めた「私語」は、1980年代後半にはどの大学でも日常化していたという。しかし、筆者が2005年に行った調査では、「授業中に私語をすることが多い」という問いに対し、ボーダーフリー大学生の37.2%が肯定的回答をしており、その割合は中堅大学生よりも統計的に有意に高かった($P < 0.01$)。この点に鑑みれば、ボーダーフリー大学の「私語」は、その他の大学に比べ日常化の程度が著しいものと推察される。また、「私語」が「ささやくこと。ひそかにはなすこと。また、その話。」(『精選版 日本国語大辞典』)と定義されるならば、ボーダーフリー大学の「私語」は、もはや「私語」という言葉では捉えきれない域に達している。

- ・私語が多い授業はほとんどなので、今ではすごいとは思わなくなりました。(4年・男性)
- ・ここそと話をするのではなく、カラオケボックス内かと思わせるような大声で会話を続ける男性数人。(中略) これまた大きい声でヒワイな話をたのしそうにしている時。大声で話すことができる話か!と思った。(1年・女性)
- ・授業中に「オナニーしてろ!」と叫べ(原文ママ)んだ人がいた。※大きな教室で、教卓の前でみんなに(4年・男性)

「私語が多い授業はほとんど」という記述から、「私語」が日常化している様子がうかがえる。「私語」の日常化によって、教室はもはや「カラオケボックス」と化しており、教員の声が邪魔だとばかりにさらに大きな声で会話がなされている。教室は公的空間ではなく、「カラオケボックス」のような私的空間だからこそ、「大きい声でヒワイな話」をすることも「オナニーしてろ!」と叫ぶこともできる。こうした風景が日常化しているのがボーダーフリー大学の「私語」の実態なのである。

また、「携帯電話の使用」も、他者に迷惑をかける度合いの強い「ながら受講」に挙げられよう。「私語」の話の後なので、「携帯電話の使用」というと「メール私語」を想起するかもしれない。確かに「メール私語」は、2000年前後からどの大学でも日常化している。しかし、筆者が2005年に行った調査では、「授業中に携帯電話でメールの読み書きをする」という問いに対し、ボーダーフリー大学生の30.2%が肯定的回答をしていたが、その割合は中堅大学生の方が統計的に有意に高かった($P < 0.001$)。この点に鑑みれば、ボーダーフリー大学の「メール私語」は、その他の大学よりも日常化の程度が著しいとはいえないだろう。しかし、ボーダーフリー大学では、携帯電話を「メール」のために用いるだけでなく、「通話」のために用いることも日常化しているのである。

- ・授業中にも関わらずけい帯電話をマナーモードにせずに大音量で着信音を鳴らし、何くわぬ顔で電話に出ている学生がいる。(3年・女性)
- ・授業中に普通に電話をしたりというのにびっくりしました。(1年・女性)
- ・この授業は、大人数だったので、部屋が広くて、話をする人が多く、電話で話していても、全く気づかれていませんでした。寝ているふりをしての電話だったのでそれができたのではないかと思います。その方は、90分間ずっと話をしていました。(4年・女性)

マナーモードにし忘れ、着信音を鳴らしてしまうことはあるかもしれない。また、用件によっては、通話しなければならないこともあるかもしれない。しかし、そうした事情にかかわらず、「何くわぬ顔で電話に出ている」学生が存在する。そもそも、「授業中に普通に電話」している学生は少ないのである。しかも、寝ているふりをしていたとはいえ、「90分間ずっと話をして」いる猛者すらいるのは驚きである。先述のような「私語」の日常化がそれを可能にするのだといえよう。

(2) 他者に迷惑をかける度合いの弱いもの

他者に迷惑をかける度合いの強い「ながら受講」の代表が「私語」なら、その度合いの弱い「ながら受講」の代表は、「いねむり」であろう。「いねむり」もまた、「私語」と同様に、どの大学でも日常化している。筆者が2005年に行った調査では、「授業中によく居眠りをする」という問いに対し、

ボーダーフリー大学生の44.2%が肯定的回答をしていたが、中堅大学生との間に統計的に有意な差はみられなかった ($P > 0.05$)。この点に鑑みれば、ボーダーフリー大学の「いねむり」は、「メール私語」と同様、その他の大学よりも日常化の程度が著しいはいえないだろう。しかし、「いねむり」が「すわったり、腰かけたりしたまま眠ること。何かをしながら、うっかり眠ってしまうこと。」(『精選版 日本国語大辞典』)と定義されるならば、ボーダーフリー大学の「いねむり」もまた、もはや「いねむり」という言葉では捉えきれない域に達している。

- ・部活に力を入れているため、勉強ができず、何教科も再試を受けなくてはいけない人や、バイトを週6入れていて、授業に来るけど、ずっと寝ている人がいる。(中略)しかも1番前で堂々と寝ている人もいるのでありえんと思います。(2年・女性)
- ・後のほうから「スースー」聞こえてきたので「誰か寝よんやろなー」と思って後を振り返ったのですが、誰もいませんでした。(中略)ずっと見ていたら、急に頭を起こして、人が現れました。どうやら、椅子に寝そべて本格的に寝ていたようでした。(2年・女性)
- ・印象的だったのは授業をしているのにもかかわらず椅子に一直線になってねている人を見たときだ。授業中に仮眠をしてしまう学生は多いが椅子に横たわって寝ている人を見ると恥じらいのようなものや常識すらもないように思える。(中略)A大学生の特徴をみれば私語を授業中にする学生よりか寝ている学生のほうが多い。内職をしているような学生はあまり見受けられないように感じる。(3年・女性)

「授業に来るけど、ずっと寝ている」「1番前で堂々と寝ている」ならまだしも、「椅子に寝そべて本格的に寝ていた」「椅子に一直線になってねている」あたり、「いねむり」どころか、「うたたね」ですらない(ちなみに、「うたたね」は「寝るとはなしに寝ること。寝床に入らないで、思わず知らずうとうと眠ること。」(『精選版 日本国語大辞典』)と定義されている)。その確信犯的な行動は、もはや「睡眠」と呼ぶにふさわしい。しかし、こうした行動自体は、「疑似出席」と同様、ボーダーフリー大学以外でも珍しくないのはいうまでもない⁵⁾。興味深いのは、「私語を授業中にする学生よりか寝ている学生のほうが多い」という点である。「いねむり」という逸脱行動の質的側面ではそう違いはないにしても、量的側面では違いがあるといえるのかもしれない。

また、「いねむり」のほかにも、他者に迷惑をかける度合いの弱い「ながら受講」を挙げれば、「ゲーム」「音楽」「マンガ」「飲食」など、枚挙に暇がない。具体的にみてみよう。

- ・イヤホンをつけて授業を受けていたり、PSP(ゲーム機)をいじっていたり、大音量で音楽を流していたり、マンガを読んでいたり。無法地帯レベルは店の駐車場さながらである。(1年・女性)
- ・授業中にご飯を食べていたことです。(中略)ご飯なので、多少においがしていたのですが、うちわや下じきであおいでそれをかくしていました。ふつうにおかしも食べていてびっくりしました。(4年・女性)
- ・後ろの方の席だったが、その中での(原文ママ)電子たばこをくわえる。(2年・女性)

ボーダーフリー大学の教室には、「PSP(ゲーム機)をいじっていたり、大音量で音楽を流していた

り、マンガを読んでいたり」する学生はいるわ、「ご飯を食べて」いたり、「おかしも食べて」いたりする学生はいるわ、「電子たばこをくわえる」学生はいるわと、もはやその「無法地帯レベルは店の駐車場さながら」である。当の学生は、「他者に迷惑をかけているわけではないのだから、とやかくいわれる筋合いはない」といわんばかりである。これらの行動を目の当たりにすることで、他者の学びの意欲が削がれていることはいうに及ばず、「大音量で音楽を流して」いることや「においがして」いることで、他者に迷惑をかけていることなど認識できていないのである。仮に認識できているのだとすれば、それはそれで問題である。「他者に迷惑をかけているとしても、とやかくいわれる筋合いはない」とさえ考えているのであろうか。いずれにしても、こうしたレベルの逸脱行動を、他者に迷惑をかける度合いの弱いものと位置づけること自体が間違いなのかもしれない。

3-3. 教員への反抗

「疑似出席」「ながら受講」とみてきたが、これらは程度差はあったとしても、ボーダーフリー大学以外の大学でもみられうる逸脱行動であった。これらを非社会的逸脱行動だとすれば、ボーダーフリー大学を特徴づけるのはやはり、「教員への反抗」という反社会的逸脱行動ではないだろうか。具体的にみてみよう。

- ・授業中にさわいでいて先生に注意された時に机をケリ、「ウザ」と言い、教室を出て行った。次の授業で注意された時も同じ様にキレてドアを強く閉めてみんなメイワクしていた。(中略) いびきをかいていて、先生に起こされ、逆ギレして「なんや。」などどなっていた。それで授業を進めれなくて他の人は困っていて、その事を先生が言うと、イスなどをけったりして、教室を出て行った。(4年・男性)
- ・先生に向かって、平気で暴言を言い、反抗する学生。英語の授業だったが、先生から英語で質問した瞬間に「分かるわけないだろうが」と言っていた。先生は、「考えようとしたの?」と聞き返したが、その生徒は、「知るか。死ね」という暴言を吐いていた。同じ2年生なのに、もう20歳になる年齢なのに、ここまで幼い人がいるんだなと思った。別に先生は、難しい質問をしているわけでもないのに、はなから聞く耳をもたずに、ましては、暴言を言ってしまう。(2年・男性)
- ・極端に暴言を吐く人は、1割くらいなのではないかと思う。(2年・女性)

教員から注意をされると、「机をケリ、「ウザ」と言い、教室を出て行」くし、「逆ギレして「なんや。」などどなって」「イスなどをけったりして、教室を出て行」くといった反抗的な態度に出る。これはよく理解できる話である。なぜなら、先述のように、当の学生は、「私語」であろうが「いねむり」であろうが、「他者に迷惑をかけているわけではないのだから、とやかくいわれる筋合いはない」し、「他者に迷惑をかけているとしても、とやかくいわれる筋合いはない」とさえ考えている節があるからである。

しかし、教員の質問(しかも難しいわけではない質問)に対し、「分かるわけないだろうが」「知るか。死ね」という暴言を吐いてしまう学生は理解し難い。とても授業中のやりとりとは思えない。ただ、これが「カラオケボックス」や「店の駐車場」でのトラブルであると考えるとよく理解できる。

ボーダーフリー大学の教員に対するインタビューでは、そうした学生を「ヤンキーじゃない。チンピラだ。」と評していた。ヤンキーどころか、チンピラに絡まれる危険性すらあるのが、ボーダーフリー大学の授業の実態なのである。ただし、「極端に暴言を吐く人は、1割くらいなのではないか」という記述からもわかるように、「教員への反抗」が、「疑似出席」や「ながら受講」のように、ボーダーフリー大学に蔓延しているわけでないことには留意しておきたい。

4. 授業中の逸脱行動に対する学生の捉え方

前節では、ボーダーフリー大学生の授業中の逸脱行動の実態についてみてきた。「教員への反抗」はもちろんのこと、「疑似出席」や「ながら受講」という言葉で一般的に想像されるレベルを超えた逸脱行動も少なくなかったのではないだろうか。それでは、こうした逸脱行動を、ボーダーフリー大学生はどのように捉えているのだろうか。

- ・普通に授業中にジュースを机の上に置いている人、ゲームをしている人、イヤホンで音楽を聴いている人は見かけます。でも、別にふまじめと思わなくなりました。多分、見慣れてしまって、それが普通になっているのだと思います。(2年・女性)
- ・「ふまじめ」なのが普通のようになってきたので、私は特に何とも言えないと思った。携帯電話をいじったり、ゲームをしたり、音楽を聞いたりするのは良くないと分かっているが、私も、よく携帯をいじるので、ふまじめな人を見ても何とも思わなくなった。(2年・女性)
- ・今までの学校生活の中でまじめでない態度が普通になってしまっているところもあると思います。今までの環境の中で授業中ケータイをいじっていたり、ガムやあめなどをたべたり、お茶やジュースを飲むということが普通におこなわれていたから、まじめでない態度になってしまっているのだと思います。逆に、まじめな態度で授業を受けようとしても自分的におちつかなくてなかなかまじめな態度で授業を受けることができないのではないのかなと私は思います。(1年・女性)

「見慣れてしまって、それが普通になっている」、「ふまじめ」なのが普通のようになってきた」「ふまじめな人を見ても何とも思わなくなった」という記述からもわかるように、大学生活を過ごすなかで逸脱行動に対する認識の感度が鈍くなっていることがわかる。しかし、そうした認識の感度が必ずしも大学生活を過ごすなかだけで鈍くなっていったわけでないことは、「今までの学校生活の中でまじめでない態度が普通になってしまっている」という記述からも明らかである。大学入学以前に、すでに授業中の逸脱行動が「普通におこなわれていたから、まじめでない態度になってしまっている」といって、そのため、「まじめな態度で授業を受けようとしても自分的におちつかなくてなかなかまじめな態度で授業を受けることができない」のである。

このような逸脱行動に対する認識の感度の鈍さも手伝って、ボーダーフリー大学生の多くが授業中の逸脱行動を行っている。それでは、そうした彼らが、「許される」あるいは「許されない」と考える逸脱行動のラインはどこにあるのだろうか。記述をみる限り、そのラインは明確に存在している。

- ・ふまじめな学生は、たくさんいると思います。授業の出席をとったら、本当た（原文ママ）ダメなんだけど帰ったり、授業中にタバコを吸いに行く生徒もいると思います。私は別に人の（原文ママ）迷わくがかからなければいいと思っています。（1年・女性）
- ・別に授業中にねたり、出席だけとって出ていったりするのは周りの人に迷惑がかからないのでいいが、大声で話したり、物を食べたりなど、周りに害をあたえるようなことは本当にやめてほしいと思う。（2年・男性）
- ・ふまじめなケースで、遅刻をしてくるや、出席だけとって出ていくや友人にたのんで出席はしないのがふまじめだと書いていたが、それは別に友人がかまわないと言ったのであれば、他の人間に迷惑はかけていないし、親が払うにしろ自分で払うにしろ同じだけの学費を納めているわけだから授業に出席する権利もあるし、遅刻にも色々な理由があるだろうと思う。なので、ふまじめだまじめだと、別に自分自身に害がないのであれば、大学生にもなって人にかんしょうしなくてもいいと思う。（4年・男性）

「別に人の（原文ママ）迷わくがかからなければいい」、「周りの人に迷惑がかからないのでいいが、（中略）周りに害をあたえるようなことは本当にやめてほしい」、「他の人間に迷惑はかけていないし、（中略）別に自分自身に害がないのであれば、大学生にもなって人にかんしょうしなくてもいいと思う」といった記述からも明らかなように、ボーダーフリー大学生の多くは、他者に迷惑をかけたり、害を与えたりするような逸脱行動でなければ、「許される」と考えている。いうまでもなく、他者に迷惑をかけているか、害を与えているかの判断は、逸脱行動を行っている当の学生の主観に拠るものではない。先述のように、当の学生には他者に迷惑をかけていることなど認識できていないからである。また、他者に迷惑をかけている、害を与えているという範疇に、他者の学びの意欲を削いでいることは含まれていない。ボーダーフリー大学生の多くは、あくまで客観的にみて明確に、他者に迷惑をかけたり、害を与えたりするような逸脱行動は「許されない」と考えているが、そうでなければ「許される」と考えているのである。

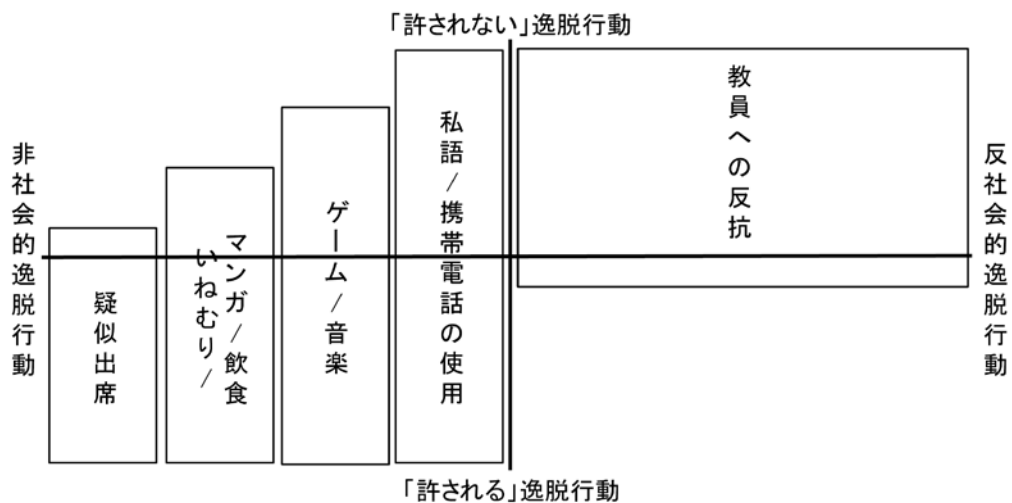


図 授業中の逸脱行動の分類

それでは、そうした「許されない」逸脱行動を行っている学生は、A大学にどの程度存在しているのだろうか。記述をみる限り、学生の認識は比較的似通っている。

- ・ A大学にはふまじめな学生が6～7割はいると思います。(中略) ふまじめな人が多い中、本当にすごい人たちは6～7割の中でも1割くらいだと思います。(3年・女性)
- ・ 7～8割方はふまじめな学生なのかなと思った。「ふまじめ」にも程度があると思うので、内訳すると「超ふまじめ2割強」「だいぶふまじめ3割」「ふまじめ4割」。(1年・女性)
- ・ 授業中に携帯をいじったり、居眠りをしたことがないなんて人間はいないと思うので、それをふまじめととらえたとしたら A大学の人間はすべてふまじめなんだと思う。私語が大きい、注意されてもしゃべる、ゲームや音楽の音量が大きいなど、他の人間に不快な思いを一瞬でも持たず人間がふまじめとしたら全体の4割くらいだろうと思う。(4年・男性)

学生の主観では、他者に迷惑をかけたり、害を与えたりするわけではない「許される」逸脱行動を行っている者を含めば、7割前後存在しているという意見が多い。しかし、「A大学の人間はすべてふまじめ」という意見も少なからずみられる。そのうち、他者に迷惑をかけたり、害を与えたりするような「許されない」逸脱行動を行っている学生はどの程度存在しているのだろうか。「本当にすごい人たちは(中略) 1割くらい」、「超ふまじめ2割強」「だいぶふまじめ3割」、「他の人間に不快な思いを一瞬でも持たず人間がふまじめとしたら全体の4割くらい」といった記述をふまえると、「許されない」逸脱行動を行っている学生は4～5割存在しており、うち「特に許されない」逸脱行動を行っている学生は1～2割存在しているものと推察される。

こうした「許されない」逸脱行動を行っている学生に対して、そうでない学生は同じA大学生としての思いを以下のように綴っている。

- ・ 自分自身がまじめとも思わないし、頭が良いと思いませんが、人間としてのルールは守るべきなのではないかと思いました。同じ大学生として、はずかしいと思うことの方が思(原文ママ)いです。(3年・女性)
- ・ 自分は諸事上(原文ママ)で、1年間だけ違う大学にいました。(中略) その時のイメージが、自分の中で“大学”だと思っていたので、A大学に来てから、本当に残念で仕方ありません。失礼かもしれませんが、同じ大学生として異常だと思いました。(2年・男性)
- ・ A大学の生徒は基本的にズルがしこいのだ。(中略) 甘い蜜を吸いたい学生は、かしこいと思う反面、見ていて腹が立つ。真面目に授業に出て、授業を聞いている人間はバカらしい、損をしていると、思わされてならない。同じA大生としては恥ずかしい。「大学生」とは名ばかりで、本当は幼稚園児や小学生並にレベルが低いと感じる。落ちつきがなく自分の事優先でありたいということが態度で表れている。あなた方は何歳だ? 同じ大学生としては引いた目でしか見えない。あきれてしまう。(1年・女性)

「許される」逸脱行動のラインの内側にいる学生は、そのラインの外側にいる学生に対して、「同じ大学生として、はずかしい」、「同じ大学生として異常」、「大学生」とは名ばかりで、本当は幼稚園

児や小学生並にレベルが低い」といったように、「自分とは違う種類の蔑むべき存在」として嫌悪感を露わにしている。しかし、ひとたび学外に出れば、そうした「自分とは違う種類の蔑むべき存在」も、自分と同じA大学の学生である。そのことで窮屈な思いをしている学生も少なくない。

- ・私は「自分はA大学生です」と外部の人に自信を持って言うことはできません。なぜなら、外部の人から、A大学生は、あんまり良い印象に思われてないと思っているからです。(中略)外部の人に「私はA大学生です」と言うと、「マナー悪い大学の人か」と思われてそうなので、ふまじめな学生と一緒にされるのは嫌です。(2年・女性)
- ・外でどこの大学生かと聞かれたら、答えないことはないのですが、最初からレベルの低い大学だと言っております。レベルが低いとは学力のことではなく、一般常識が成っていないという意味です。同じ大学に通っているという事実は変えられないですが、同じ勉強をして、同じ授業の単位を習得したとは考えておりません。(2年・男性)
- ・先生に反こう的なたいどを取る人を見ていると、こんな人と同じ大学なんだ、下に見られるという意味がよく分かるなと思いました。(3年・女性)

「自分はA大学生です」と外部の人に自信を持って言うことはできません、「外でどこの大学生かと聞かれたら、答えないことはないのですが、最初からレベルの低い大学だと言っております」という記述からは、自尊心を揺るがされることのないよう、窮屈な思いをしているボーダーフリー大学生の姿がうかがえる。

留意したいのは、そうした学生の窮屈な思いが、当該大学の入学難易度の低さに由来しているのではなく、当該大学の学生が「マナー悪い」、「一般常識が成っていない」、「先生に反こう的なたいどを取る」といったことに由来しているという点である。学生の窮屈な思いは、当該大学の学生の「しつけ」のいたらなさ由来しているといいかえられよう。

記述から判断する限り、ボーダーフリー大学生は、入学難易度が低いことは承知の上で当該大学に入学してきたのだから、その点に関連して自尊心を揺るがされることはあまりなく、仮にあったとしても甘受せざるをえないと考えているようである。しかし、「しつけ」のいたらなさという点で、「自分とは違う種類の蔑むべき存在」と同列に扱われることは甘受するわけにはいかないと考えているようである。なぜなら、自分の価値がいたずらに低く見積もられてしまう危険性があるからである。「ふまじめな学生と一緒にされるのは嫌」だが、「同じ大学に通っているという事実は変えられない」以上、身分を隠す、予防線を張るといった、自尊心を揺るがされないための対処戦略を採る学生も少なくないのである。

5. 大学の授業に対する学生の期待

前節でみてきたように、ボーダーフリー大学生の多くは、あくまで客観的にみて明確に、他者に迷惑をかけたり、害を与えたりするような逸脱行動は「許されない」と考えているが、そうでなければ「許される」と考えている。そうした彼らは、逸脱行動の蔓延する当該大学の授業をどのように捉え、ど

うあってほしいと考えているのだろうか。

- ・ 先生も、生徒を注意することばかりで、授業を進めることも出来ず、わかりたい生徒も理解出来ないという悪循環がおこっていると思います。(2年・男性)
- ・ 残りの3割の人は、いたってまじめです。残りの人だけでも、良い環境で、勉強できるようになったらなと思います。先生方も、もっときびしくしてほしいです。(2年・男性)
- ・ ふまじめだとみんなを感じる学生がいるんだとしたら学校側が高い学費をみんなから受け取っているんだからそういうものを排除するべきだ。(4年・男性)

現状では、「先生も、生徒を注意することばかりで、授業を進めることも出来ず、わかりたい生徒も理解出来ないという悪循環がおこっている」。「大学の授業は学びのために存在する」にもかかわらず、「良い環境で、勉強できるようになったらな」という当然担保されてしかるべき願いが叶えられない現実がそこには存在している。そうした現実を打破するために、学生が「先生方も、もっときびしくしてほしい」と考えるのは当然であるし、「ふまじめだとみんなを感じる学生がいるんだとしたら学校側が高い学費をみんなから受け取っているんだからそういうものを排除するべきだ」と考えるのも当然である。特に「疑似出席」や「ながら受講」に対する厳格な対応を望む声は少なくない。

- ・ 率先して後ろの席に座るようにしている人も多くそのような人達は講師の目ができるだけ届かないようにして出席だけしておけばいいという考え方なのだと思いますが、(中略) そんな人達でも普通に評価されるような講義ですとやはりまじめに取り組もうと考えていても影響を受けてしまいあまり本気で学習しようという気がなくなってしまう。(中略) やる気を維持するための外的要因も重要になってくると思います。(3年・男性)
- ・ 私は授業、講義では必ず指定席を設けて、私語をしている学生には大きな減点を与え、注意しても聞かない場合には出席にしないという方法を取ればいいと考える。また、代返もできなくなります。私語を消すには、厳しくしないといけない。(2年・男性)
- ・ ふまじめな学生を減らすために…。授業中であるならば、厳しいしつけをする。というのも、学生の意識に「この先生は怒らせてはならない」や「こわい、きびしい」という項目が組み込まれているであろう先生の講義ではたいいていの学生は大人しくしており、騒ぐことがないように見える。対して、優しくおおらかである先生や、自分一人で話を進めて、一度話して「怒られない」と分かった先生の講義では話し、飲み、食べ、音楽を聞いたりという人が多く見られる。(1年・女性)

先述のように、ボーダーフリー大学には、「まじめな態度で授業を受けようとしても自分的におちつかなくてなかなかまじめな態度で授業を受けることができない」学生が少なくない。こうした学生の学びの意欲は、たとえ他者に迷惑をかけたり、害を与えたりするわけではない「許される」逸脱行動であったとしても、それを許してしまう授業の雰囲気によって容易に崩れ去る。「そんな人達でも普通に評価されるような講義ですとやはりまじめに取り組もうと考えていても影響を受けてしまいあまり本気で学習しようという気がなくなってしまう」という記述はその証左であるといえよう。

学びたいと思う学生の学びの意欲はもちろんのこと、「まじめな態度で授業を受けようとしても自

分的におちつかなくてなかなかまじめな態度で授業を受けることができない」学生の学びの意欲をいかに維持するかは、彼ら自身が「許される」と考える逸脱行動すら「許さない」授業の雰囲気づくりにかかっているといても過言ではない。「やる気を維持するための外的要因」として、例えば「必ず指定席を設けて、私語をしている学生には大きな減点を与え、注意をしても聞かない場合には出席にしない」といった対応まで望む声は、さすがに学びの意欲が高い学生に限られるだろう。しかし、記述から判断する限り、授業中の逸脱行動への対応は「厳しくしないといけない」と考える学生は、学びの意欲が高い学生に限らず、他者に迷惑をかけた、害を与えたりするわけではない「許される」逸脱行動を行っている学生には少なくないようである。こうした「厳しいしつけ」の効果は、「学生の意識に「この先生は怒らせてはならない」や「こわい、きびしい」という項目が組み込まれているであろう先生の講義ではたいていの学生は大人しくしており、騒ぐことがないように見える」という記述からも明らかである。

6. まとめ

本稿では、授業中の逸脱行動の実態だけでなく、逸脱行動に対する学生の捉え方や大学の授業に対する学生の期待を分析の視角として、ボーダーフリー大学が直面している教育上の困難を明らかにしてきた。分析の結果得られた主要な知見は以下の通りである。

第一に、ボーダーフリー大学では、「疑似出席」や「ながら受講」のような非社会的逸脱行動が蔓延している。しかし、これらは程度差はあったとしても、ボーダーフリー大学以外の大学でもみられる逸脱行動である。その点で、「教員への反抗」という反社会的逸脱行動は、ボーダーフリー大学を特徴づけるものであるが、蔓延しているわけではない。

第二に、ボーダーフリー大学生の多くは授業中の逸脱行動を行っている。しかし、彼らが「許される」あるいは「許されない」と考える逸脱行動のラインは明確に存在している。すなわち、あくまで客観的にみて明確に、他者に迷惑をかけた、害を与えたりするような逸脱行動は「許されない」と考えているが、そうでなければ「許される」と考えている。

第三に、「許される」逸脱行動のラインの内側にいる学生は、そのラインの外側にいる学生に対して、「自分とは違う種類の蔑むべき存在」として嫌悪感を露わにしている。しかし、ひとたび学外に出れば、同じA大学の学生として「しつけ」のいたらない彼らと同列に扱われてしまうため、自尊心を揺るがされないための対処戦略を採る学生も少なくない。

第四に、ボーダーフリー大学生の学びの意欲は、たとえ他者に迷惑をかけた、害を与えたりするわけではない「許される」逸脱行動であったとしても、それを許してしまう授業の雰囲気によって容易に崩れ去る。学生の学びの意欲をいかに維持するかは、彼ら自身が「許される」と考える逸脱行動すら「許さない」授業の雰囲気づくりにかかっている。

最後に、こうした知見をふまえた上で、ボーダーフリー大学の主要な教育目的とは一体何なのか、それを獲得させるためにはどういった方法が考えられるのか、といった点についての考察を行いたい。

筆者は、ボーダーフリー大学の主要な教育目的は、当該学生に専門分野の知識・技能を修得させる

ことよりもむしろ、学習習慣や学習レディネスを獲得させることであるべきだ、とこれまで言及してきた(葛城 2010)。その主たる根拠は、矢野(2005)が提示した「学び習慣」仮説⁶⁾に顕著に示されている。この「学び習慣」仮説は、入学時点で学習習慣や学習レディネスに乏しいボーダーフリー大学生が、卒業時までにはそれらを獲得できなければ、卒業後のキャリアにとって大きな損失を被る可能性があることを示唆するものである。

しかし、本稿の知見をふまえれば、ボーダーフリー大学の主要な教育目的が、当該学生に学習習慣や学習レディネスを獲得させることだけでは十分でないのは明らかであろう。すなわち、社会に出しても恥ずかしくない態度を最低限身につけさせることが、ボーダーフリー大学のもうひとつの主要な教育目的であるべきなのである。

ボーダーフリー大学生の目からみても「幼稚園児や小学生並にレベルが低い」学生に、社会に出しても恥ずかしくない態度を最低限身につけさせるためには、徹底的に「しつけ」を行わなければならない⁷⁾。その役割を担う重要な場のひとつとなるのが授業である。「しつけ」という観点で、学生自身が「許される」と考える逸脱行動すら「許さない」授業の雰囲気づくりを徹底して行う必要がある。

そんなことをしていると、「先生も、生徒を注意することばかりで、授業を進めることも出来ず、わかりたい生徒も理解出来ないという悪循環がおこ」るのではないかという懸念もあろうが、中途半端な取組であればこうした事態に陥ってしまうことになる。学生自身が「許される」と考える逸脱行動すら、社会に出れば恥ずべき行動であることを学生にしっかりと伝えた上で、ルールを明確化し、それを違反すれば厳格な対応がとられることが学生に理解されてさえいれば、そのルールに適應しようとする学生は少なくないはずである。大規模大学であるならまだしも、ボーダーフリー大学の多くが小規模大学であるのだから、十分な効果が期待できるだろう。

重要なのは、こうした取組を個々の教員レベルではなく、大学レベルで行わなければいけないという点である。個々の教員レベルで行っている限りは、学生は易きに流れてしまうから何の効果もなくなる。ボーダーフリー大学の中には、経営的観点から、学生対応に及び腰になっている大学も少なくないようである。先述の「出席さえすれば、単位がとれるシステム」になっている大学はその典型例であろう。そうした大学の存在を考えると、大学レベルでのこうした取組は現実的には難しいのかもしれない。しかしだからこそ、それに乗り出す大学の希少価値は大きなものとなるのであり⁸⁾、それがひいては、「しつけ」のいきとどいた大学」というブランドを確立することにつながるのではないだろうか。

注

- 1) 例えば、小林(2007)は、大阪府内のO大学の授業中の逸脱行動の様子を、同大学の自己評価・点検報告書の記述を引用して紹介している。入学難易度が示されていないため、O大学がボーダーフリー大学である可能性はあるものの、ボーダーフリー大学であるとは明示されていない。興味深い内容なので、少し長くなるが引用したい。

「大教室の通路に立ったままで、座っている学生に話す者あり、どたんばたんと足音高く室内を歩く者あり、窓際に数人で座っておしゃべりする者あり、講義には揚げ足をとる者あり、やじる者あり、飲酒運転ならぬ飲酒聴講あり、始末に困った。階段教室の背の高い座席の後ろの、教卓から見えないあたりで、六人が車座に座って花札をしているのを発見した。もちろん叱りとばした。

逃げていった最後の二人は私が何もしていないのに階段を転げ落ちた。授業中に先生に隠れてトランプや花札、碁や将棋をするという行為は、高校生ののりではないかと思うが、これも大人の幼稚化という時代の流れか。ぼうずの札を一枚忘れていった」(小林 2007、46-47 頁)

- 2) 遠藤 (2006) は、「達成の本質がいつの間にか失われ、代用的な別種の事柄 (アリバイ) へと置き換わること」(遠藤 2006、17 頁) を「疑似達成」と呼び、出席 (点) はその典型だと言及している。こうした言及を参考に「疑似出席」という表現を用いた。
- 3) 筆者が 2005 年に行った調査では、「授業はできるだけ休まないようにしている」という問いに対し、ボーダーフリー大学生の 78.5% が肯定的回答をしており、その割合は中堅大学生よりも統計的に有意に高かった ($P < 0.05$)。「出席さえすれば単位がもらえる」と考えているからこそ「授業はできるだけ休まないようにしている」ことがうかがえる。
- 4) 島田 (2001) の「ながら聴取」という表現を参考にした。なお、島田 (2001) は、授業を聞くことに重みがあるのではなく、他のことをすることの方にウェイトがあるのを「ながら非聴取」、授業をまったく聞こうとしないのを「非聴取的聴取」と表現する。
- 5) 三浦 (2008) は、「早稲田大学に行くと学生が床で寝ているんで驚くよ。」(三浦 2008、82 頁) と言及している。
- 6) 矢野 (2005) は、「大学時代の「学習熱心度」は、現在の地位に直接的な効果を与えていない。しかし、「学習熱心度」は、「卒業時の知識・能力獲得」を媒介として間接的に現在の地位を向上させている。大学時代の積極的な学習経験が、本人のさまざまな能力向上と成長体験をもたらしている。その蓄積と体験が、現在に必要な知識・能力を向上させ、その結果が仕事の業績などに反映されている。」(矢野 2005、274 頁) と言及している。このことから、矢野は、「大学で学習に取り組むことによって、成長体験が蓄積され、学習が習慣化される。その習慣が卒業後の学習を持続させているのではないか」(同上、275 頁) という「学び習慣」仮説を提示している。
- 7) 杉山 (2004) は、「社会の中でのマナーとはどういうものか。礼儀とはどうすることか。文化とは何か。親も、小学校も、はては中学・高校さえも避けて通っているのなら、あるいは、社会そのものが秩序を失ってしまったから家庭だけではどうしようもないのなら、大学で教え込まなければならない。親と力を合わせてと言いたいところだが、その親が頼りにならないときている。だから、まずは大学からしつけの教育を始めよう。」(杉山 2004、86 頁) と言及している。
- 8) 新堀 (1992) は、「マナーの教育を重視して常識ある市民を送り出す大学の存在価値は大きいといわねばならない。それに乗り出す大学が少ないだけに、希少価値も大きい。」(新堀 1992、254 頁) と言及しているが、こうした状況は 20 年経った今も変わらない。

参考文献

- 遠藤竜馬、2006、「変容する達成主義社会のなかの非選抜型大学—予備的考察と現状分析—」神戸国際大学経済文化研究所編『経済文化研究所年報』第 15 巻、1-21 頁。
- 小林哲夫、2007、『ニッポンの大学』講談社。
- 葛城浩一、2007、「F ランク大学生の学習に対する志向性」大学教育学会編『大学教育学会誌』第 29 巻第 2 号、87-92 頁。
- 葛城浩一、2010、『大学全入時代における学生の学習行動—「ボーダーフリー大学」を中心にし

てー』広島大学大学院教育学研究科博士論文。

三浦展、2008、『下流大学が日本を滅ぼす！―ひよわな“お客様”世代の増殖―』KKベストセラーズ。

日本私立学校振興・共済事業団広報、2011、「平成二十三年度私立大学・短期大学等入学志願動向」『月報私学』vol.165、6-7頁。

島田博司、2001、『大学授業の生態誌―「要領よく」生きようとする学生―』玉川大学出版部。

島田博司、2002、『私語への教育指導―大学授業の生態誌2―』玉川大学出版部。

新堀通也、1992、『私語研究序説―現代教育への警鐘―』玉川大学出版部。

杉山幸丸、2004、『崖つぶち弱小大学物語』中央公論新社。

山田浩之、2005、「学生文化研究の課題」藤井泰・山田浩之編『地方都市における学生文化の形成過程―愛媛県松山市の事例を中心にして―』松山大学地域研究センター叢書第3巻、1-17頁。

矢野眞和、2005、『大学改革の海図』玉川大学出版部。